

## チャールズ・ハーツホーンの生涯と思想（Ⅱ）

大塚 稔

### Charles Hartshorne's Life and Works（Ⅱ）

Minoru OTSUKA

#### Ⅷ-7 ミシガン大学生物学研究所

シカゴ大学の同僚たちとは感性が合わず、何かと気まずい雰囲気であったようだが、彼は思いを新たに鳥類学の研究を始めた。55歳にして、少年の頃に一時夢中になった鳥類学の研究を再開した。もっともタフツが病に倒れてその代わりに美学を講義したのが新たな動機付けになったと述懐している<『中庸の知恵』訳書182頁<*Wisdom of Mode ration* .p.106>。タフツは、1928年当時美学の講義で原始芸術に関する講義を行っていた。もっぱらアメリカ・インディアンの芸術であった。彼に代わってスライドを使用しながら講義を進めたが、ハーツホーンの念頭には、もっとも原始的な芸術は人間以前の動物たち、例えば、鳥や他の動物たちの「囀り」や「ダンス」にあるのではないかという思いがあった<『中庸の知恵』182頁>。そして彼は、「人間以外の動物で、音楽を奏でる被造物に共通したものは何か」という一般的な問題を考え始めた。彼の得た結論は、鳴き鳥たちには、少なくともある程度は、音楽的な音を出したり聴いたりするのを、生まれながらに享受できる能力があって、囀るように動機づけられているというものであった。これをハーツホーンは「美的仮説」と呼んだ。鳥の場合にも人間の場合も、基本的には思考ではなく、感覚や感じが振舞いを助長し、自己報償のないし自己向上的にさせるのである。囀りに象徴される音楽は、テリトリーや保護色性の由来を考慮し、一定の距離をおいてもなおかつ意志伝達が可能な手段として進化した。囀りは意志伝達の手段である。もっと言えば、囀りは生き物の心を捉える有力な窓である。鳥の囀りは、音楽的感覚の原始的な形式であって、進化の圧力によって、一部の種にそのような音楽的感覚の発展が助長される。それは、その行動による表現がそれらの種の子孫繁栄に役立つからである。「原始的、美的な音楽的感覚は、一部の種には、生物学的に有用である。それによって、鳥はさえずること自体を享受している。進化は、常にその行動を促進するようなく感じ>を選択してきた」<『中庸の知恵』189頁>。その意味では、囀りの技術は、限界はあるもののある程度、予測不可能な行為として進化すると言える。

世界は、種々の感じによって満たされている感じの海である。我々はその感じを同じように感じ取らねばならない。鳥の囀りは単にその一つにすぎない。自然をよりよく理解すればするほど、宇宙の原理が美的なものであるという信念が増す。実在はまったき秩序でもまったき無秩序でもない。

退屈な、絶対的な秩序と絶望的なまでの無秩序とは、ともに幻想である。完全な決定論を排除するという意味では、神もサイコロ遊びをするのである。これが、ホワイトヘッドからハーツホーンに受け継がれた信念であった。

ホワイトヘッドの形而上学では、美的秩序の崩壊は美的な不整合ないし無秩序によるものと、単調ですらある完全な秩序性ないし規則性にあると解釈されていた。ハーツホーンは、鳥の囀りにはこれら二つの両極端をうまく回避した巧みな美が認められると考えた。こうして彼は、(1) 鳥の囀りには音楽的に明確に分析可能な構造があること、(2) テープレコーダーや他の器機を使うことでこれらの構造がかなり正確に捉えられること、(3) 鳥の生物学上の機能についてはおおそよく知られていること、(4) 鳥の脳は、脳としての機能を知る上には、学習能力の限界にあること、(5) 鳥の一部の行動は、その家族生活や、嗅覚よりも視覚や音に多く依存する生活習慣などから判断して、極めて人間に近いこと、などを理由に、鳴き声の大きさ、連続性、複雑性、音色、音楽的調和、模倣能力という六つのパラメーターを使って、囀りの優劣を数値化しようとする研究に取り組むことになる<『中庸の知恵』186頁>。これは、*Born to Sing: An interpretation and World Survey of Bird Song*という著作になって、1973年に公刊された。『小鳥はなぜ歌うのか』(岩波文庫)の20-21頁には、このハーツホーンの手紙が紹介されている。小西氏によれば、ハーツホーンの説には色々反論もあるが、それに当てはまる例も多いと、現在でもそれなりに評価されている。

1951年から52年にかけて、ハーツホーンはフルブライト奨学金教授としてオーストラリアに行っている。メルボルンで講義をする傍ら、目的の一つでもあった鳥類の観察を行った。生物学者のチャールズ・バーチやJ.J.C. スマートやJ.L. カッキーとはこの時知り合っている。他にシドニーやアドレイド、タスマニアなどに出向いて講演を行ったが、おそらくその場所場所でバードウォッチも楽しんだものと思われる。この時観察した鳥については、約2年後、オーストラリアの学術誌 *The Emu* に“Musical Values in Australian Bird Song”として発表した。

その間に彼は、同時に本格的に鳥類学を勉強し始めている。1952年と1953年の夏季休暇を利用して、ミシガン大学生物学研究所に鳥類学の集中講義に通った。受講希望を知ったペティンギルは、ハーツホーンのことを知らなかったらしく、アン・アーバー大学の哲学科に問い合わせている。そこでのやり取りは、「私たちは彼がそのような関心を持っているとは知らなかったが、彼が持っているというのなら、間違いなく持っていますよ」<DL.p.268>という返事であった。ハーツホーンは、このことを知って、太鼓判を押された自分の評価に満足している。その後、ペティンギルは丁寧な手紙を書き送った。「あなたが関心を抱いておられる鳥の囀りの研究は存分にできます」と<DL.p.268>。彼はこうして、シーウォール・ペティンギルの指導を受けることになる。本格的な鳥類学研究の始まりである。

ペティンギルは、科学者として徹底した事実志向の持ち主であった。幅広い教養を持った専門分野の知識も豊富な人物で、明晰な言葉を話した。ハーツホーンのように理論に夢中になる人物ではなかった。ハーツホーンをアマチュアの鳥類研究者から本格的な研究者に仕上げたのは、彼であった。鳥類学協会ではじめて自分の鳥類学に関する論文を発表した際、ペティンギルは、「非常に熱心なあなたを見て率直に申し上げるべきだと思うのですが、専門の鳥類学者はおそらくあなたの理論に不信を抱くでしょう」と忠告した。この忠告を何より幸運なことと考え、ハーツホーンは範囲を絞って理論化し直したものを、1956年に学術誌 *The Auk* に発表している。表題は“The

Monotony Threshold in Singing Birds”である。また鳥の囀りと音楽を比較した論文“The Relation of Birds Song to Music”を *Ibis* に発表したのは、1958年であった。

ハーツホーンは、単に理論にだけ興味を持った研究者ではない。理論を支える材料を求めて、彼はテープレコーダーとマイクを手に世界中を歩き回った。大半は講演旅行を兼ねたものであったが、ジャマイカや東アフリカなどはただ観察のためにだけ行っている。先に触れたオーストラリアをはじめとして、ニュージーランド、フィリピン、ハワイ、台湾、イギリス、アルゼンチン、ドイツ、インド、日本ほか40カ国、米国内でも40州を歩いた。1958年には日本の京都大学で集中講義を行っているが、その際にも『源氏物語』を愛読されていた妻のドロシーさんは、石山寺の「源氏の間」に興味を持たれたが、ハーツホーンは杉の木の下で鳴いていたオオルリにご満悦で、源氏の間は省略された。鞍馬山や信州の高原、木曾の山中に入って鳥の囀りに聞き入っていたく野田又夫『哲学入門』ミネルバ書房、259頁>。

鳥類学は、そもそもエリオット・ハワードのようないわば素人が育ててきた学問である。その意味ではハーツホーンにも鳥類学者になり得る可能性は充分にあった。しかし哲学者として独創的な思想を展開しながら、なおかつ鳥類学にもそれなりに貢献した学者は極めて少ない。哲学者が同時に自然科学者でもある例は多いが、鳥類学との組み合わせは希である。ワレス・クレイクは、比較行動学の創始者と言われるが、哲学の問題に独創的な寄与をなしたとは思えない<『中庸の知恵』182頁>。ハーツホーンは純粋な自然科学者ではないが、独自の形而上学を経験科学に応用しようとした意図は、それなりに評価されるべきであろう。その分野にも形而上学的観点から何らかの貢献ができたという自負心がハーツホーンには認められる。同僚や学生たちとの人間関係に精神的に孤立していたハーツホーンにとって、鳥たちの囀りを聴くことは一種の慰安にもなったのかも知れない。

## VIII-8 シカゴ大学退官

ハーツホーンは、1955年、27年間勤めたシカゴ大学を退職する。58歳であった。彼はこの間、共著を含め、次の七冊の書物を公刊した。

*The Philosophy and Psychology of Sensation, 1934*

*Beyond Humanism, 1937*

*Man's Vision of God and the Logic of Theism, 1941*

*The Divine Relativity, 1948*

*Whitehead and the Modern World, 1950*

*Reality as Social Process. 1953*

*Philosophers Speak of God, 1953*

他に論文と書評を合わせて、186篇発表しているが、数頁に満たないものも沢山ある。この年齢にしては、決して多産な方ではない。しかしハーツホーンの本格的な著作活動は、実際はこれからが始まりなのである。シカゴ大学退職後に書かれた著作は13冊に及び、論文、書評の総数は1991年現在で既に482を数えている。1996年発行のプロセス思想には巻頭論文を寄稿している。100歳の誕生日を迎えても未だ思考力は衰えていない。新たな著作も出版されると聞く。

このようなことを勘案すると、思想家としての活動は、むしろシカゴ大学からエモリー大学、テキサス大学に行くほど旺盛になっていると考えられる。創造的過程という形而上学上の概念を身を持って示す人生とも表現できる。後の活動を見る限り、カルナップや同僚たちから大きな刺激を受けたものの、ハーツホーンにとって、シカゴ大学は思想的には閉塞状況にあった。なぜハーツホーンはシカゴ大学を退職したのだろうか。自伝『光と影』で、ハーツホーンはあえて一節を設けてその間の事情を説明している。

カルナップやスミスなどが在籍中には、ハーヴァード大学に匹敵するほどの大学であった。しかしそのカルナップも、1954年に、ライヘンバッハの後任としてカリフォルニア大学に転出したし、T. V. スミスも既にシラカス大学に移籍していた。論理実証主義のシカゴ学派もプラグマティズムのシカゴ学派も影が薄くなりつつあった。もともと思想的に孤立していたハーツホーンは、ますます孤立感を深める。学部の運営からはほとんど離れ、同僚との交流もなくなる。それは、学部のためにも私のためにも良かった。もっとも自分よりも他人に責任があったとは断言できないし、人間関係を非難や中傷をもとに考えるのは余りにも単純だとした上で、ハーツホーンは、それを「偶然」という言葉で説明している。そして「リチャード・マッケオンと私とが同じ大学にいたこと自体が災いであった。お互いのためにも良くはなかった。もしこの責任を誰かに帰せてよいのなら、それは、学長ロバート・ハッチンスをおいて他にない」と述べている<DL.p.243>。ハッチンスが学長にならなければ、マッケオンが同僚になる可能性はなかったはずである。ハーツホーンは、あれこれのことをすべて結局は偶然の仕業と解釈した。この世に生を受けることが一つの偶然であってみれば、このような人間関係も単なる偶然でしかない。しかし個人の好みとも言うべき趣味や感性の相違に起因している場合も多い。

ハーツホーンはその種の感情のもつれを、特に感性的な趣味の相違と表現している。知人の哲学者が、勤務する大学で口論になった事例を挙げて、彼は相手を倫理的に責めたてていたが、実際は、彼にも分かっていないようだが、感情的、感性的な趣味の相違であって、要は彼がその同僚を気に入らないというだけにすぎない。ユーモアや想像性に欠けるとか、だるいやつだとかという個人の趣味、感性の問題であって、倫理的、思想的なものではない。ハーツホーンも、それが言いたいのであろう。気に入らないということに、合理的な説明はない。理屈は後からついてくる。それだけのことである。

子供が問題児になるのは、生まれたときに愛情を受けていないためである。育児の中心が倫理的な躰や身体健康ばかりに向けられ、肝心の感性の育成が忘れ去られている。それは倫理的な躰や身体健康に先んじて、何よりも優先されねばならない。まず「子供は愛されなければならない」。落ち着きがなく、退屈した、感受性のない親に育てられれば、後にどれほど倫理的な躰をしていても、当人は精神障害に苦しむのが落ちである。命題は、真である以上に興味関心を引くようなものでなければならない。ハーツホーンは、育児にたとえて自分が一種の精神障害に近い状況にあったことを示唆している。彼の孤独感も、子供と同じように良き理解者に恵まれなかった孤独感であった。これには、生活自体が一種の芸術ないし超芸術であるというハーツホーンの想いがあった。感性に合わない連中との交際にどれほど辟易していたかが推察される。「シカゴ大学の連中は、頭が良くて知識も豊富であった。口頭試問をすれば巧みに弁舌を操った。しかし彼らの言葉は陳腐であり、質の高い学識に欠けていた。その会話は退屈でしかなかった。散文的に退屈げに喋ることはあつ

でも、彼らの会話には詩がなかった。かといって、カルナップのように厳密な数学的表現において物事を捉えようとする姿勢もなかった」〈DL.p.290〉。かなり辛辣な非難である。もっとも当時の学生たちの教授評として、ハーツホーン自身がこのようなことを書き残している。これはある女子学生の言葉である。「ワーナー・ウィックは、朗らかで感受性に富み、すべてに親切である。マツケオンはいくらか偏屈だが、無視できない考え方を持っている。ハーツホーンは偏屈なだけである」〈DL.p.248〉。このハーツホーン評については、彼自身、直接、彼女にあつて謝罪の言葉ももらっている。自分の授業にほとんど出席していない学生の批評に不快感を隠しきれなかったようだ。確かに大学院の学生たちとは余りうまくいっていなかった。それがシカゴ大学退職につながるのも事実である。

ハーツホーンは、このようなシカゴ大学時代を回顧して以下のように語っている。

「シカゴ大学着任について尽力してくれたアディソン・ムーアは、心を許せる同僚の一人であったが、病弱であつて、数年にして死去してしまつた。エヴァレット・ホールとはうまくやっていたが、学長ハッチンスとの諍いがもとで、退職を余儀なくされた。私が聡明な教師、崇高な人物として尊敬してやまなかつたアーサー・マーフィーも、同じようにハッチンスともめて退職した。バートは良い人物だったが、何の刺激も受けなかつた。ミードの妻は病気であつたし、ミードもまもなく病気になってしまつた。タフツも病に倒れた。モリスとペリーは良識ある知性の持ち主だが、哲学的な関心から言つて私とはほど遠かつた。この哲学科は、私のような興味と性質を持った人物にはほとんど魅力のない学科であつた」。

ペリーの司会のもと、彼は退職の弁を率直に述べた。内容は定かではないが、あるいは先のような内容のことであつたかもしれない。ペリーは、ハーツホーンの退職には難色を示したが、慰留できないことを知ると次のような言葉を述べたという。「私は、哲学者ではない人々と一緒にいるのも楽しめるが、良き哲学者といれるならそれに越したことはない。最悪なのが出来の良くない哲学者と一緒にいるときだ」〈DL.p.289〉と。どうにでも取れる言葉だが、おそらくハーツホーンが去るのを惜しみ、他の同僚たちの無能を暗に批判したものであろう。しかしこのようなペリーの言葉ももはや無益であつた。結局、シカゴ大学時代での唯一の収穫は、極論すれば、ドロシーを妻にできたことだけであつた。カブなどの弟子たちも、新たな鳥類学への挑戦も、カルナップも、ドロシーには及ばなかつた。

ハーツホーンがこのような想いを抱いていた頃、同僚で既に退官していたコルウェルが、エモリー大学の学部長になっていた。そのコルウェルの招きで、彼はエモリー大学に移ることになる。そこには、既に馴染みのリチャード・ホッキングやルロイ・ロウムカー〈Leroy Loemker〉もいた。彼らもすべて私を同僚にすることを歓迎してくれていた。

## IX エモリー大学

ハーツホーンがエモリー大学に赴任したのは、1955年である。その後、この大学には1962年まで在任している。ハーヴァード大学では、自分の意志ではなく不本意にも退職させられたが、シカゴ

大学は自らの意志で退職した。エモリー大学赴任までの経緯をハーツホーンは次のように記している。

「誰も一言もそのようなことは口にしなかったし、私がエモリー大学に行くと言ったら、驚きを隠せず言葉を詰まらせた者もあった。私は、昇給は要求せず、ただエモリー大学の申し出を受けるとだけ言った。なぜ。給料はエモリー大学の方が良かったが、お金のためではなかった。地位のためでもなかった。ペリーから教授昇進の通知を受けてから一年も遅れてではあるが、ようやく教授にもなれた。このいずれも退職の直接の動機ではない。大学院の学生との人間関係であった。神学部やそれに統合された神学研究所にいた学生たちは別だが、それ以外の哲学に関心を持った大方の学生たちが、私からよりも、他のところで知識を得たいと思ったからである。この屈辱を乗り越えるには、私が辞めるか、この勝負に敗北したことを認めるか、いずれかしかなかった。私は新たなスタートを切るために退職を決意した。この闘いは、成功の見込みがあるなしに関わらず、時間とエネルギーの無駄だと私には思えた」。<IAH,p.37>

悲壯感を漂わせる文面だが、実際のところはどうかこれだけではよく分からない。おそらく自分の講座を学生たちが全く受講しなかったのかもしれない。いずれにせよ、学生たちとの気まずい人間関係に起因したものであったことは間違いない。

そのようなこともあって、ハーツホーンはエモリー大学に赴任する。しかし北部から南部アトランタに移住すること自体、客観的に見れば決意のいることであった。というのも、ハーツホーンがエモリー大学に転出する前年の1954年5月17日には、最高裁判所が公立学校における人種隔離を違憲とする判決を出したばかりであった。これは、「隔離はしても平等ならよい」という1896年以來のプレッシーらの原理の崩壊を意味した。また着任早々の1955年12月には、アラバマ州モントゴメリーの市バスのなかで、ローザ・パークス女性が、白人のために席を譲るように言われたのを断固拒否して、黒人解放運動の口火が切られた年でもある<『アメリカ黒人の歴史』本田創造、岩波文庫180-181頁>。まさにこの年は解放運動元年であった。解放運動が活発になるにつれて、南北ブラック・ベルトが徐々に崩壊し、南北の移住が盛んになる時期に重なっている。黒人は北部を目指し、白人は南部を目指した。ちなみにジョージアは1960年の国勢調査でもっとも黒人人口の多い州であった。

しかしハーツホーンは、南部に行くことにあこがれを持っており<DL,p.244>、政治的平等の実現に向け活発な運動を展開しようとしている南部に大きな可能性を見出していた。まさに始まろうとしている大きな歴史の流れに深い関心を持っていた。アトランタでは、マルティン・ルター・キング牧師やベンジャミン・メイズらの演説を聴いている。またシカゴ大学の教え子で、モアハウスカレッジで哲学を講じていた青年は、アトランタの全米黒人地位向上団体<NAACP>のリーダーになって、バス内での人種隔離反対運動の先陣を切ってもいた。こうした中で、ハーツホーンのエモリー大学での生活が始まる。彼は、結局このエモリー大学には7年間勤務した。

ハーツホーンは、この時代は、ドロシーが病に臥したこと以外には、おおむね良い時代であったと回顧している。学生の質は良く、かつ少人数教育のできる環境にあった。きわめて理想に近い教育環境のもとで、ハーツホーンは自らの哲学を講義した。このエモリー大学では、プロセス研究の

編集者で、ホワイトヘッド研究者としても有名なルイス・フォード、彼は後に学位を取るためにイエール大学に移っている。シカゴ大学での教え子でもあった科学的素養の深いルシオ・シアラヴィルギオ<Lucio Chiaraviglio>、彼はローマで生まれ、ブエノス・アイレスで育ち、ケンタッキーの娘を嫁にした人物だが、形式論理学に明るく、コンピュータサイエンスや進化論、生態学にも通じて頭脳明晰な学生であった。彼は、ハーツホーンの書物の中では、‘Born to Sing’が最上であると考えていたらしい<DL.p.289>。また他にソロー研究者のディケンズやニーチェ研究者のジョン・ウィルコックスらが育った。学生には恵まれ、教育環境も満足な上、もはやここには敵はいなかったし、学部内で起こるごたごたに悩む必要もなかった<DL.p.289>。

エモリー大学の同僚たちは、時代を方向付けるような画期的な研究をしている者は少なかったが、シカゴ大学の同僚とは異なり、陳腐な言葉は口にせず、機知に富んだ情緒豊かな良識ある人物たちであった。ハーツホーンは、このような同僚たちをどのように見ていたのだろうか。

「学科長のロイ・ルームカーは、素晴らしい教師であるだけでなく学識豊かな、陽気な機知に富んだ人物であった。ある時、私が<三足の草鞋>を履いていることをとがめたことがある。鳥類学、哲学、神学の三つの分野にもものが書けることに対する非難であった。ちょっと羨ましげな様子であった。彼には情熱がなかったわけではないが、学科長、後には学部長の重責にあって、野心を実現する時間がなかった。

リチャード・ホッキングは、歴史家として優れたものを持っていたが、私の見るところ、彼には父アーネスト・ホッキングのように思弁的な哲学者になるという脅迫観念はなかった……。彼の言語表現能力は特に秀でていた。彼の祖父は詩人であったし、彼の母親はその父の感化を受けて極めて創造力に富んだ人物であった。哲学の知識のない学生を評して、ホッキングは、「彼にはその分野の地図が必要だ」と表現した……」。

和やかな雰囲気を感じさせる人物評である。彼をくつろがせたのは人物だけではなかった。エモリー大学では、宗教哲学が学部の中心であったため、シカゴ大学のように神学部や神学協会の片隅で身を潜める必要もなかった。おそらく独創的な思想家として丁重にもてなされていたのだろう。このような環境が幸いしてか、異例のことに彼ははじめて、鳥類学を成人教育講座の一貫として講義する恩恵に浴した。これは、単位認定のともなわない講座であったが、ハーツホーン自身にも受講者にも好評であった。授業にペットとして飼っている鷹まで持参してきた熱心な女性は、受講を終えた後、その内容を踏まえた詩を手紙に添えて送っている。

二匹のコマドリ共には住めず  
縄張り内ではもめごと絶えず  
壁が周りに巡らされ  
孤独を相手に歌に酔う

ハーツホーンはこれほど見事に鳥類の生態を歌にしたものはないと絶賛している。テリトリーを守りながら、孤独を慰めるべく歌を創造しているコマドリの姿を彷彿される。

ハーツホーンは、学生にも環境にも講義にも申し分のない状況にあった。一方妻のドロシーは、大学院生のホーマー・エドワーズと共同で‘Collegium Musicum’を創設し、バッハなどの古典派作曲家の合唱曲を歌って楽しんでた。彼女はまた別に、芸術協会なども設立し、自ら会長になってもいる。子供向けのミュージカルを上演してかなりの収益を上げたりした。ハーツホーンらはこの収益を‘Collegium Musicum’にまわそうという意図であったが、誤解されたらしく他の人々と争いが生じた。アトランタでの不運は、ドロシーの事故とこの紛争であったと述べている<DL.p.291>。

ハーツホーンが京都に講義に来たのは、このエモリー時代である。1958年、ハワイ、フィリピン、台北を経て京都に来た。これは、国際宗教学会出席を兼ねての来日であった<1984年に南山大学で開かれた日本ホワイトヘッド・プロセス学会主催の国際会議での基調講演 ‘The Convergence Of Western And Eastern Thought’, p.1>。途中、台北で二度講演を行い、京都では、夏期集中講座を担当した。三時間の授業を週5日、それを4週間にわたって行っている。この集中講座を経験して、彼はこの形式が教育効果を高めるには最善であると考えようになったという<IAH.p.42>。であれば、ハーツホーンはこの時、最高の授業を行えたことになる。

彼は、京大での集中講義決定を機縁に、来日前に T. R. V. Murti の *The Central Philosophy and Buddhism* を読んでいる。これによって、ブラッドリーの関係理論がアジアにおいて遙か以前に発見されていたこと、そしてブラッドリーに近い考え方で解釈されてもいたことに気づかされた<DL.p.293>。しかしハーツホーンは、ブラッドリーも仏教徒も、この関係性を正確に分析していないと考えた。8年後、ハーツホーンはベナレスに行き、マーティーとこの問題を話し合ったが、一致した見解には至らなかった。しかしハーツホーンには、仏教徒も、ブラッドリーも、マーティーも、ジェイムズも、クワインも、カルナップも、関係概念を最善に分析したとは思えなかった。それを行ったのは、パースとホワイトヘッドだけだというのが、ハーツホーンの本音であったが、まだこの問題は決着していないとも述べている<DL.p.294>。

ハーツホーンがこの時代に公刊した書物は、著書 *The Logic of Perfection And Other Essays in Neoclassical Metaphysics* 一冊と、論文と書評の48篇である。

## X テキサス大学

ハーツホーンがエモリー大学を退職したのは、1962年。規定では、後3年は勤めることができたにもかかわらず、早めに退職を決意している。今回も自発的な退職であった。これには、先に記したようにドロシーが金銭に絡んだ争いに巻き込まれたこと。また交通事故に合って以来、ドロシーは芸術協会と自分の身の始末とに追われ、慢性的な精神的苦痛に辟易していたことなどが大きく作用している<DL.p.295>。とにかく住んでいる町自体に興味が湧かなくなった。それが、ドロシーの偽らざる心境であった。一方ハーツホーンには、エモリー大学の同僚たちとの思想の不一致も、大学当局との考え方の不一致もなかった。取り立てて不自由はなく、不満もなかった。ただあるとすれば、定年までが短いことであった。

ちょうどその頃、テキサス大学の学科長であったジョン・シルバーから、講演依頼があった。ハーツホーンは、講演依頼がくるまでは、あるいは実際にオースティンに行って講演をするまでは、ま



さかテキサス大学に来ることになるなどとは想像もしていなかった<DL.p.295>。講演終了後、シルバーはハーツホーンを昼食に招待し、その場で、テキサス大学着任について相談を持ちかけた。

ハーツホーンは驚いた。実は、数年前にも、シカゴ大学の同僚であったマーフィーからテキサス大学への招聘依頼があったが、その時には断っていたからである。素晴らしい環境にあるエモリー大学は、まだ彼には掛け替えのない存在であった。「勝利の女神を前に、ゲームを諦めるものはいない」というのが、その時のハーツホーンの返事であった<DL.p.295>。

しかし今回の誘いには動揺した。ハーツホーンは、移籍に伴う障害をいくつか述べたが、シルバーはそれらをことごとく説き伏せた。最後にハーツホーンは、現在博士号取得のために指導している学生の件に触れたが、それもシルバーは特別に休暇を与えて指導に帰ることを認めた。考えつく障害はすべて取り除かれた。労働条件は、70歳で給料が半分、時間が半分になるが、その時点で退職してもよく、またそのままその条件で教え続けることもできた。これはアメリカでも極めて異例な恵まれた労働条件であった。この規定を設けたのは、当時テキサス大学の学部長であった A. P. ブローガンである。これによってハーツホーンだけでなく、ブローガン自身もその恩恵に浴することになる<DL.p.301>。エモリー大学は、その当時財政面で貧窮状態にあった。ハーツホーンは、とりあえずエモリーに帰って、移籍に伴う条件をそれぞれ吟味したが、どちらも捨てるという結論に至った。仕方なくドロシーに決定を委ねたが、彼女の決定はオースティン移住であった。ハーツホーンは、その決定に従った。これが、テキサス大学移籍の顛末である。

このテキサスには、シカゴ大学の教え子であるデイヴィッド・ミラーがいた。ハーツホーンは、1951年にこのミラー家に1週間ほど泊まっている。バードウォッチングのためである。その際、ミラーから、世界的に有名な野生生物学者であるエドガー・キンケイドを紹介された。キンケイドは終日、野鳥観察に同行した。彼の叔母は、「ハーツホーン先生が、一日中、野鳥を観察したいとは思っておられないだろう」と言っていたらしいが、ハーツホーンの方はその時、「一日中鳥の話ができる人物にはじめて会えた」<DL.p.298>と喜んだ。一日中哲学に浸るのは無理かもしれないが、自然観察は一日中でも飽きることはない。この時既にバードウォッチングは、それほどハーツホーンを引きつけていた。

このようなこともあって、オースティンはまったく馴染みのない町ではなかった。テキサス大学では、このキンケイドの近くに居を構え、毎日のように会って会話を楽しんでいる。彼に、自然のことを尋ねると、いつでも十分な返答を聞くことができた。キンケイドは、『テキサスの鳥の生活』の編者兼著者として知られ、後に賞をもらっているが、人物は温厚かつ寛大であった。また誰にでも鳥の名前を付けたと言われている<DL.p.299>。ハーツホーンにどのような鳥の名前を与えたか定かではないが、自分自身には「老いたヒクイドリ」という名を与えている。彼が自分をこのように名づけた理由は、「鳥は何世紀にも互って人々に抑圧されてきたが、このヒクイドリだけは唯一反撃のできる鳥であったからだ」という<DL.p.299>。爪で致命的な打撃を与えることができる鳥であった。もっともこれには、他人に害を与えたいという欲求ではなく、人間が与える害にでも何とか自分を守ってほしいというキンケイドの願いが込められていた。ハーツホーンは、彼の言葉として次のような文章を書き留めている。「宇宙には二つの強烈な力が働いている。一つは、望んでいないことを集め凝縮する力、もう一つは、望んでいることを散らし発散させてしまう力である」。ハーツホーンは、彼を暢気な悲観主義者と捉えた。

しかしハーツホーンが彼に鳥に関する初期の論文を送った際には、遠慮のない批判を受けている。ハーツホーンはこの批判を謙虚に受けとめた。

テキサス大学の哲学科には、逝去したダグラス・モーガン、デイヴィッド・ミラー、A.P.ブローガンらがいた。モーガンは、学者としてだけでなくその振舞いにおいても一級の人物であった。ブローガンは、倫理学およびギリシャ哲学の優れた研究者であった。ミラーは、ミード研究の第一人者であり、ハーツホーンは、ミードより明晰にミードの立場を述べ得た人物とすら評している。信頼のできるユーモアのある人柄であった<DL,p.300>。このミラーとは、家族ぐるみの付き合いをしている。彼が退官するときには、珍しく自作の詩を彼に捧げている。55年ぶりの作詩であった。

カンザスの大草原に生を受け  
 陽気な妻メアリーと結ばれた  
 ミードを語れば第一人者  
 その名は世界に知れわたる  
 森に入れば巧みな樵  
 教師としても秀逸で  
 思慮に富んだ者らしく  
 語る言葉も合理的  
 それでも過去は変え得ると  
 決定論に背を向けた  
 その大胆な主張は支持したい  
 生成流転のただ中に  
 被造物にも恵まれた  
 創造行為の泉湧く  
 機知に富み  
 思慮にも優れたデイヴィッド  
 陽気なメアリーともどもに  
 幸多かれと祈念する

原文は、美しい韻を踏んでいるが、この訳詩には表現できなかった。いずれにせよかなり散文的な詩ではある。ハーツホーンは詩に託して、デイヴィッドの誕生から思想、人格までを表現してみた。

なお他に同僚として、リーブ、ブラウニング、ボースマ<Bouwsma>、モールロトス<Mourelotos>、アレール<Allaire>、ケイン、コーセイ、ノーマン・マーティンらも名を連ねていた。リーブとブラウニングは、ハーツホーンと同じく形而上学を教えていたし、ボースマは過激な言語分析家で反形而上学の立場を採っていた。もっとも形而上学は個人的な信念上の事柄であって、合理的に論議できないという意味での反形而上学者であった。形而上学をまったく否定していたわけではない。モールロトスは、倫理的立場からギリシャ哲学を講じていたが、学生には非常に人気のあった学者であった。アレーは懐疑論を講義し、真理は対象との一致にあるとする考え方を批判していた。

ケイン、コーセイ、ノーマンの三人は、自然科学に造詣が深く、共に哲学科の永年会員であった。

ハーツホーンは、特にロバート・ケインに強い関心を示した。特に彼の充足理由の原理に関する論議に注目している。ケインによれば、この原理の古典的な形式では強すぎて、結局、厳格な決定論に導かれるとされ、この原理の否定形式の方が科学には有用だと指摘した。思考の上では何の問題もなく考えられるような出来事が自然内にまったく観察されない場合には、それを生じないようにさせている法則を探るべきだと言うのである<DL.p.304>。これは、永久運動する機械の存在を否定する法則に比肩される。このような否定的な法則は、何が生じるのかを明確に教えないが、生じない事柄については多くを教えてくれる。これがおおよそそのケインの主張であった。完全な決定論に批判的であったハーツホーンは、これに大いに賛同した。そして、これを次のように解釈し直している。例えばカントの定言命法は、すべて否定形式であった。隣人を愛せ、親切であれ、他人と協調せよというような主張は肯定的だが、明確さに欠ける。逆にこれを否定的、つまり殺すな、嘘をつくな、約束を破るなど表現すれば、明確になると<DL.P.304>。そして次のような文章を認めている。

「科学も倫理学も未来の細目をプログラム化できるというような素振りを見せるべきではない。指針や種々の否定は与えられても、出来事の個別な進路を事前に予測することはできない。我々の努めは、一步一步未来を創造し、他の被造物にもその限界内でそうすることを望むことである。科学は、意志決定を明確に説明する前に、意志決定の限界を超え出ようとしている。またこれは、高等動物だけではなく原子にも当てはまる。被造物を下等な方向に降りれば降りるほど、決定の限界は狭められるが、決定がなくなるわけではない。この点にこそ、個別な決定論的法則ではなく統計的法則に依拠した物理学の意味がある。我々の自由は、我々内部の粒子の偶然的性質によるのではない。自然には自由の階層があって、すべての法則と秩序には、ある程度、生成変化する局面と同時に、実在の知識ではなく、実在の確定した事実<definiteness>を増し加えるような創造的決定を持った局面がある。我々の行為の予測不可能性は、我々が途方もない高度なレベルにある存在だということを認めた上でなら、粒子のレベルと類比してもよいが、粒子の振舞いから単純に由来するものと考えてはならない。私は、このような観点をパースとホワイトヘッドから50年前にほぼ同時に学んだが、それ以来現在まで、その主張を押し通してきた。落ち着きのない世間も、いくらかこのような見方に関心を持ってきているし、少なくとも物理学者にはこの点の理解は行きわたっている。しかしこのメッセージは、哲学者も世間一般の人々も、声を大にして語る必要がある。偶然性を否定する見方、具体的な出来事を事前にあるいは永久に決定できるとする観点、これらは、なかなか抹殺できない古代からの迷信である。特に後者の観点は、たとえそれが神の摂理に基づくこうと、カルマによろうと、はたまた盲目的因果的必然性であろうと、不合理きわまりない主張である」<DL.p.305>。

テキサス大学には、海外も含めて種々の教授たちが来訪した。ハーツホーンは、その都度彼らと会い、歓談を楽しんだ。歓談相手は、ボイス・ギブソン、ジョン・フィンドレイ、マリオ・ブンゲらである。それぞれから大きな刺激を受けたにちがいない。フィンドレイやブンゲの名前が見られるのは、1962年以降の著作においてである。

定年の心配がなく、同僚たちや来校者にも恵まれた環境のなかでハーツホーンは、存分に思索を成熟させた。この時代に公刊した書物は、以下の9冊である〔訳注：過去の論文を集めた書物も含まれている〕。

*Anselm's Discovery, 1965*

*A Natural Theology for Our Time, 1967*

*Creative Synthesis and Philosophic Method, 1970*

*Aquinas to Whitehead, 1976*

*Insights and Oversights of Great Thinkers, 1983*

*Omnipotence and Other Theological Mistakes, 1984*

*Creativity in American Philosophy, 1984*

*Wisdom as Moderation, 1987*

*The Darkness and The Light, 1990*

1962年から1991年に書かれた論文、書評の数は、243に及んでいる。

ハーツホーンは、このような環境のなか、もう転居することなく、このままオースティンに永住しようと決心している。大学の内外には素晴らしい数多くの友人もいるし、1978年以来、テキサス大学の Ashbel Smith Professor Emeritus にもなっている。ドロシーの自動車事故を契機に、特に車を必要としない生活スタイルを固持してきたが、その点も申し分はなかった<IAH,p.39>。

## XI 西洋思想と東洋思想

ここでは1962年のテキサス大学着任以後の講演旅行についていくらか触れておきたい。主だった講演旅行は3つある。一つは1966年のインド、もう一つは1974年のオーストラリア、最後が1984年の日本である。

インドでは、ベナレス・ヒンドゥ大学で2カ月を過ごした。そこで T. R. V. マーティーやスリ・アウロビンド<Sri Aurobindo>の弟子たちや、ハイデガーの研究者 J. L. メータに会っている。マーティーと関係概念に関する論議をしたのはこの時である。またメータには、「あなたの哲学とハイデガーの哲学とでは比較すらできないほど異質である」と言われ、それを忘れ得ない指摘と受けとめた。ハーツホーンは、この指摘を自分の哲学に対する高い評価だと解釈した。偉大な真理があるとすれば、それはキリスト教と仏教の間のどこかにあるというのが、パースやホワイトヘッドの信念であった。ハーツホーンも生涯、その間にあるものを模索し続けていたが、この初めてのインド旅行で、その想いを新たにしたいにちがいない。

オーストラリアでは、国際鳥類学会とオーストラリア哲学会に出席し、同時にシドニー大学で講演を行った。その際、D. K. アームストロングやケイス・カンベルに会っている。とりわけケイスの *Body and Mind* に対する批判は厳しい。

「彼は<新現象主義>を提唱しているが、その理論によれば、精神ないし現象的な諸属性によって起こされる意識は、ある物質的な原因によって起こされる非物質的な作用であると言われながら、原因として働くこれらの非物質的な作用には物質的な作用は存在しないとされる。すべての原因は

物的対象によるものだが、いくつかの作用はいかなる物質にも還元できないという。この書物の普遍的な精神論に反対する論議には、パースやホワイトヘッドの名はまったく挙げられていないし、私の立場にも触れてはいない。彼らが精神的な一元論を論じた方法についてもまったく理解が示されていない。サンタヤナの精神論とどれほど異なっているのか私には分からない」(IAH, pp.42-43)。

たやすく形而上学を批判する者は、パースやホワイトヘッドなどの新しい形而上学を知らずに批判している場合が多い。ハーツホーンは、絶えずそれを指摘することを忘れない。この時の主張も、基本的にはカルナップに対するものと変わっていない。

日本では、南山大学に來ている。これは、筆者も所属している日本ホワイトヘッド・プロセス学会がはじめて主宰した国際大会であった。真夏の1984年8月20日から23日まで開催された。当時まだオーバー・ドクターで、定職の当てのない非常勤生活者であったが、大会には1日だけ参加した。その際に、当時日本ホワイトヘッド・プロセス学会会長でもあった松延先生から、ハーツホーンを紹介された。ハーツホーンの著作 *Whitehead's Philosophy* を訳出中であることを報告し、ついでにいくつか質問をしたのを覚えている。ハーツホーンは、饒舌に話し続けられたが、未熟な筆者にはよく理解できなかった。

この大会で、ハーツホーンは「西洋思想と東洋思想の収束点」という演題で基調講演を行なった。当時、87歳であった。以下は、その基調講演で読まれた論文である。

### 西洋思想と東洋思想の収束点

26年前、私ははじめて日本に來ました。1958年に開催された宗教史国際学会に参加を促され、フルブライトを利用して來日しました。日本に來たかった理由はいくつかあります。アジアでもっとも科学技術が進んだ国であることを知っていましたし、私が興味を持っている分野ならどのような分野でも必ず専門家がいると思っていました。これには哲学だけでなく鳥類学も含んでおりました。私は失望感を抱かずに済みました。鳥類の研究には大いに役立ちましたし、強い興味を持っていた仏教の専門家にも、また西洋哲学の専門家にも会うことができました。しかも私が主だって批判してきたキリスト教神学の専門家にも見え、私の意見に賛意を表してくれました。私の妻は、日本の印刷物をずっと楽しんでおりましたが、その時更に研究を進め、今でも仏教芸術に強い関心を持っています。以来、妻は今回の旅行を含め都合6度日本に來ており、私は今回で3度目の來日になります。

日本文化の歩みは、言うまでもなくアングロ・アメリカの文化の歩みとは異なっておりますし、またアジアの他の諸文化の歩みとも異なっております。中国仏教を受け継ぎながら、古代の神道との驚くべき巧みな同化を経て、更に西洋科学と科学技術との発展が加わり、たぐい稀な結びつきを生み出しております。

アメリカ人のチャールズ・パースとアングロサクソン系のホワイトヘッドとの両方から、私はもっとも深遠な真理がキリスト教と仏教の間のどこかにあるという想いを強く感じさせられました。パースはかつて、自分の見方を、<仏教的-キリスト教的宗教>の可能性を探る一つの解釈だと言っておりました。またホワイトヘッドもキリスト教と仏教はお互いに学び合う必要があると書いており

ました。私が青年の頃に傾倒していたエマーソンは、ヒンドゥー教的一元論の崇拝者でありましたし、ある日本の著作家も、禅とニューイングランドの超越主義に関して魅力ある書物を書かれています。

周知のように、東洋でも西洋でも、現在では以前の時代に比べてお互いに対する関心が高まっております。できればこの機会を利用して、いくらかでも、両者の隔たりが何とか埋められればと思っております。プロセス哲学は、この変革を生む重要な一つの思想だと思われれます。この場を借りて、この思想の今後の進展と展望を私なりに披瀝したいと存じます。

西洋思想は、二千年来、神を除く実在を、個体の多様性として、つまり現実に変化しながらも自己同一的であるような個体の多様性として見なしてきました。仏教はその間、特に北伝の大乗仏教では、実在を、二つの方法で捉えてきました。一つは、ものや人の多様性としてではなく、移り行く状態や出来事のも多様性として捉える見方、もう一つは、生成もなく、つまり生じたり滅したりすることもなく、誕生や死もない、文字どおりには記述もできず、区別もできない実在として、捉える見方です。自然を科学的に説明しようとしてきた西洋でも、ヒュームを皮切りに、とりわけここ数十年は、ものや人を出来事として分析する方向に進んでおります。その点では徐々に仏教的世界観により近づいてきていると言えるでしょう。

古いアリストテレス的な実体概念、つまり個体でありながら完全に自己同一的であるような実体概念は、ようやく影を潜め、既に二千年前のアジアで考えられていたような、移り行くものの「相依相関<dependent origination>」として、つまりそれらの移り行くものがお互いに因果的に関連し合いながら、それらの継起が変化する個体の中にある実在を構成するという見方に移行しつつあります。言い換えれば、これらの個体は一般に思われているほど他のものと明確に区別できないし、また変化を通じて厳密に同一的でもないという見方です。相対性原理や量子物理学によって影響を受けたホワイトヘッドは、他の西洋哲学者の誰よりもこの変化を完璧に捉えておりました。また仏教とがそれに倫理的意義を見い出していたのと同じ意義を、ホワイトヘッドも見い出していました。つまりその意義とは、人格の自己同一性は、極めて相対的かつ不完全なものであって、同時に人格間の非同一性も相対的かつ部分的でしかないということです。だから、西洋の哲学者たちがしてきたように、他人に対する関心を、つまり利他主義を、利己主義から引き出そうとしたり、またそれを利己主義によって正当化したりするのは、合理的な考え方だとは言えません。根本となる関心は、現在の状態に対する関心であります。つまり現在の私ないし現在のあなたは後の私ないし後のあなたに利用されるために存在するのです。いずれの方法でも、現在の自己の関心は乗り越えられます。私の生であろうとあなたの生であろうと、生が生を要求するというのが、基本的な要求なのです。東洋では、人間の生だけでなくすべての生がこれに含まれます。西洋の思想も、アルバー・シュヴァイツァー以来、この東洋的な考え方に近づいてきました。

西洋思想が東洋思想に接近する傾向を取りつつあると言える第二の方向は、次の点にあります。初期ギリシャ哲学のもっとも偉大な唯物論者はデモクリトスですが、周知のように彼は、精神を単なる物質によって説明しようとしただけでなく、同時に物質に関しても因果的決定論者で、原子に依存するすべてが完全にその原因によって決定されると考えました。ものは必然によって生じるというのが、彼の主張でした。しかし後期ギリシャの唯物論者であるエピクロスは、決定論者ではありませんでした。因果関係をデモクリトスと同じように考えたのは、ストア派だけでした。しかし

ヘレニズム以降の時代に、二つの出来事が起こりました。一つは、全能の理論を持ったキリスト教神学が因果的決定論に神学上の解釈を与える傾向を強く打ち出しました。(およそ1600年以前には)神の力との関係で、人間の自由という観念は明らかに一貫して受け入れられることはありませんでした。神の意志決定は、あらゆる物事を完全に決定したように見えました。17世紀のイタリアの神学者、ファウストス・ソツィーニがこの伝統を破壊しました。神は、我々に代わって我々の決定を行わない。我々が決定をし、神がそれを受け入れるだけであると言ったのです。このようにして、我々が神の生に新たな内容を与えて、神に変化を生じさせるのです。これが最初のプロセス神学なのです。歴史家も百科辞典もこのことについては何も触れません。まだ知らないのでしょうか。歴史家も百科辞典もこの点では4百年も時代遅れになっております。しかも大半の神学は、現在でも中世的な状況にあります。

因果関係の理論にちなんで西洋で起こったもう一つの出来事は、近代科学ですが、それは近年になって決定的な形態を取りました。この理由は単純です。近代科学は、ギリシャの最善の科学がそうであったように、数学的な正確さを目指していました。これを達成する最善の方法が、かりに達成され得るとすれば(プラトンは、それが完全に達成される可能性に強く反発しましたが)、まさに決定論的立場なのです。因果的条件が与えられれば、それぞれに生じる事柄は正確に自然法則によって特定されるというわけです。19世紀までは、この考え方が普遍的でした。しかし気体の統計的法則が発見されてそれに疑問が抱かれ始めました。もうそれぞれがお互いに関係づけられるような個々の分子の後を追って、それぞれの分子の振舞いの法則性を調べることができなくなっています。それはまったく不可能なのです。気体中にある莫大な数の分子が互いに押し合っている様を、統計的に計測して蓋然的に捉えることだけしかできないのです。偉大な物理学者のマックスエルと、まったくマックスエルとは無関係な物理学者であり偉大な哲学者でもあるチャールズ・パースが、今までに知られていてもよかったです。個体のそれぞれの分子の振舞いには厳密な決定論は妥当しないということを見抜いたのです。実際に適用できるのは、ただ統計的な諸法則だけなのです。量子力学の発展につれて、一般の物理学者にもこのことがはっきりと知られ始めました。私たちが知っていることは、純粹に統計的な、粒子の半減期の法則だけです。それによって、私たちは現に発見されている粒子の振舞いを知るのです。分子同様、粒子にも、道程を選択するというささやかな自由として、個体としての自由があるかもしれませんが、それを一つの原理として示すには不十分です。これが、チャールズ・パースの見方です。ホワイトヘッドもパースとは無関係にこのような考え方を採るに至りました。

なぜこのような見方が最近になって出てきたのでしょうか。数学史を見れば分かりますが、数学で蓋然性(確率)が取り上げ出したのが、最近のことだからです。しかもその初期の段階では、実際の個体の作用がまったく知られていなかったのです。ギリシャ人たちは原子を想像はしましたが、それらの振舞いを観察したり計測したりする方法を持っていなかったのです。原子を直接目でみることはできませんし、触れて確かめることもできません。天体やガリレオの落下物のような物理学で扱われる物体は、莫大な数の分子、原子、粒子の塊です。更には生命の原子とも言うべき細胞は、ライプニッツがあると予測したにもかかわらず、19世紀の後半になってようやくはっきりと確認されたものです。細胞は、それを殺すか性質を変質させるかしない限り、一つずつ計測することはできません。私たちには、それぞれの脳細胞が置かれたある特殊な状況か何か中で、実際にどのよう

な働きを行っているのか、正確に知ることは決してできないでしょう。細胞にもおそらく何がしかの自由はあるはずです。

パースとホワイトヘッドは、相互に独立して、すべての単一ないし個的な実在には、いかに原始的なレベルや単純なレベルにあるものであっても、何がしかの自由があるという一般化に達しました。ホワイトヘッドの「究極的なものカテゴリー」や「創造性のカテゴリー」には、この原理が含まれています。存在するとは創造すること、つまりある程度は自由だということです。決定論は、どのような事例に当てはめられても厳密に真とは言えません。伝統的な因果的決定論の意味合いを持った自然法則は、まったくの単純化であって、どこにあっても文字どおり真とは言えないものです。こうして結局、私たちは、原子にも僅かばかりの自由を認めたエピクロスに戻るのです。

東洋では、数学は最近に至るまで数学は西洋ほど重要な役割を持ってきませんでしたので、西洋の因果関係の観念を持った進化論に似たものを東洋で探し出すのは困難でしょう。しかし決定論は、東洋ではそれほど一般的ではなかったように思えます。もっともカルマには、曖昧な決定論、あるいは決定論に近い観点があるかもしれませんが、それがどれだけ明確で厳密な観点を意図したものであったのか考えると、怪しまざるを得ません。またもう一つ明かなことは、神が人生の細部にわたって永遠に決定づけるという神学上の決定論的観点、全能の観念をぞっとするほど陰気なものにしたその観点が、東洋では、中世の西洋ほど支配的ではなかったという点です。古代ギリシャでは、ストア派がそのような観点を採っていました。神学上の決定論は、中世ヨーロッパの最悪のつまづきであって、それはストア派が古典ギリシャの諸体系の中にあってもっとも貧相な体系であったことに似ております。

プロセス思想は、仏教と同じように、ものや人を最終的な用語として分析・吟味する哲学ではなく、出来事、状態ないしは移り行く諸存在を最終的な用語として分析・吟味する哲学です。それは、創造的自由の哲学であって決定論的因果律の哲学ではありません。それは、ポスト中世の、ルネッサンス後期の、もっと一般的に言えば、20世紀の新たな形而上学なのです。プロセス思想は、至高な実在ですらも、人間を含む一般の存在と比較されたり、あるいは比較はされるが同時に超えられないものでもあると考えるような、二面性において捉える思想です。例えば神は、いかなる意味でも無限ですし、無限性が一つの卓越性であるということにも意味があります。しかし同時に神はまた、いかなる意味でも有限ですし、有限性が一つの卓越性であるということにも意味があります。他の様々な対概念—例えば絶対的—相対的、無差別的—差別的、統一的—多樣的、永遠的—時間的—などにも同じような二面性があります。

仏教者の中には同じ方向で考えている人もいるでしょうが、比較するのは困難です。少なくとも強調の置きどころには大きな相違があります。仏教が、アドヴァイタ・ヴェーダント主義 <advaita vedantism> や正統ヒンドゥー教と実際に異なったものであるなら、プロセス思想はより仏教に近いものだとは言えるでしょう。

西洋思想の第3の観点は、それが、唯物論と心身二元論との間を揺れ動いてきて、単なる物質や精神のないものや過程を完全に排除する観念論は、少数派の立場であったという点です。ライプニッツ以前には、確かにそのような理論は西洋には存在しませんでした。大乘仏教には、「精神のみ」とか「すべてに仏性あり」という表現がありました。私は、これらの言葉を、単に唯物論だけでなく二元論をも否定するものと解釈しております。ライプニッツからホワイトヘッドに至る西洋思想



にも、同様の考え方が育まれてきました。ホワイトヘッドは、唯物論と心身二元論とを、空虚な実在と呼び、固有の生や感じや自由もまったくなく、それ自身にも価値のないものとして否定しております。このような立場は現在でも少数派ですが、ライブニッツからホワイトヘッド、パース、ベルクソンに至る偉大な建設的な形而上学者の中で、明確に唯物論の立場や二元論の立場ですらも、採った哲学者はほとんど一人もおりません。そういう意味では、西洋も東洋にますます近づいてきたと言えましょう。しかも科学の進歩によって、ますます物質と精神との古典的な区別が疑わしくなってきただけでなく、その科学から消し去られたものは、生命や精神の方ではなく、古典的には死せる物質に帰されてきたような諸性質の方でした。相互におつかり合ったり、押し合ったり、引き合ったりするだけで影響を及ぼし合う固体としての物体という古い観念は、もはや量子力学には見られませんし、物理学も一つずつ取り出された単一な個体にまったく自由が存在しないと主張することもあります。ホワイトヘッドが述べましたように、物質を本質的にもっとも原始的な形態の精神に還元させなくするようなものは、科学から一つずつ抜け落ちて、最後には何も残らなくなるでしょう。完全な観念論が、ようやく現在になって可能になってきました。

大乘仏教によって主張された「相依相関的存在」<dependent origination>は、ホワイトヘッドのもっとも独創的な考え方である抱握にいくらか似ております。ある一つの現実存在は、例えば私の現在の経験は、先行のものを抱握することによって、自らを後続するものとして生み出し、創造するのです。後続するものの与件は、先行するものに依存しております。しかしその与件は、どのように抱握されるかまで正確に指定することはありません。これは、論理的に不可能なことです。というのも、その新たな実在がもう一つの実在の事例になって、実在全体の限定性に自らを付け加えるからです。つまりより多いものはより少ないものから生じるのです。先行の多様な実在は、新たな単一な実在の中に抱握された与件として保存されます。ホワイトヘッドの言葉を借りれば、「多が一になり、一つだけ増し加えられる」のです。その新たな一<unity>が先行の多<multiplicity>に必要なものなら、無知な観察者以外には、それが新たなものとは見えません。或るものを知り、理解するということは、その或るものが或るものであることを知ることなのです。私たち大人は子供であったことが必要ですが、私たちが子供であったことは、私たちが大人になることを必然的にはしませんでした。それらの子供たちは子供時代を生き通せなかったかもしれないのですから。生命が危ういものだということには、この真理が含まれています。過去の出来事が後のすべての出来事には必要なのであって、逆ではありません。これが「時間の矢」と呼ばれる、時間と生成の非対称性なのです。中国仏教では、それが日本の文化に引き継がれたのですが、特に法蔵<Fa Tsang>の華嚴<Hua Yen>の伝統では、生成の非対称性が否定され、先行の出来事が後続の出来事に必要であるだけでなく、後続の出来事が先行の出来事にも必要であると主張されました。この対称性の要求は、近年の日本の新仏教的哲学、例えば西谷の哲学、などにも見られます。これは、西洋では昔からあった考え方で、私たち西洋人には馴染みの理論であります。ストア派やスピノザ、現代ではブラン・ブランシャール<Brand Blanchard>その他の多くの哲学者たちがこの考え方を採ってきました。これは、因果的必然性の理論であって、原因には結果が、結果には原因が対称的に必要とされるという理論であります。まさに意志決定の自由を否定するものに他なりません。ベルクソン、ホワイトヘッド、パリに亡命したロシアのニコライ・ベルジャーエフなど、多くの哲学者たちは、これを拒否してきました。この点では、プロセス哲学と大乘仏教との間には

無視できない相違があります。西洋人は、物事を処理する過程を強調しますが、プラグマティックな考え方はこれに由来しております。

ホワイトヘッドと仏教徒が目立った相違は、よくご存知のように、彼の有神論にあります。ここにも文化の相違が出てきます。有神論は、日本や中国—あるいはインドよりもという人がいますが—よりもはるかに顕著にみられます。しかしこれらの文化上の対比は誇張することもできます。C. R. V. マーティーに聞いた話ですが、インドはどこの国よりも有神論的だそうですし、仏教学者の鈴木は、禪が有神論的でないと言えるかどうか確信が持てないと言っておりました。彼に確信が持てないことが、私に確信できるのでしょうか。それは、ニルヴァーナや悟り、救済をどのように捉えるかに左右されます。ニルヴァーナが単なる消滅であれば、なぜそれが人生に相応しい目標になるのでしょうか。ただ存在しないことによって苦しみから逃れることが、それほど望ましいことなのでしょうか。またニルヴァーナに積極的な意味があると言うのなら、それは一体何なのでしょう。ある仏教徒は、ニルヴァーナとは純粋な至福だと言ったそうです。しかしそれは、誰の至福でいつどこで享受される至福なのでしょうか。このように問い詰めると、仏教上の諸概念は論理則に従った分析には不向きだと例の調子で言われるでしょう。しかしどうすれば、ニルヴァーナに積極的な意味があると知ることができるのでしょうか。その言葉で表現し得ない洞見が得られるまで瞑想しなさいという返答が返ってきそうです。これは、私たちには不可解な返答ですが、この答えに満足する人々もたくさんいます。

ホワイトヘッドは、明確に肯定的な答えを与えております。それは一面では、仏教徒の返答と重なっています。利己主義や自己中心性を乗り越えて、人類の将来だけでなく生き物や動物種の将来をも超え出た目標に生きるところに、喜びと平安が存在するのです。ホワイトヘッドはもっと簡単に、平安とは、個々人の生の冒険が一なる宇宙の冒険に含まれることだ述べております。ホワイトヘッドにとって、一なる宇宙とは神に他なりません。大乘仏教は、このようなことは述べず、私たちは人生において一体何をしようとするべきなのかという問いに明確に答えるだけです。私なりの法蔵解釈では、すべてが「相互に結びついている」という観点から見れば、経験によって確認される実在のそれぞれの自己存在が欠如しているために、それは、すべての過去だけでなく、すべての未来の状態に左右されるという主張だと思えます。この結びつきという言葉は、ナーガールジュナを敷衍したヒンドゥー学者<ラマノン>が繰り返し強調した言葉であります。しかしこれは、ホワイトヘッドや他の多くの学者達が近年、科学や哲学、宗教の分野において徐々にではありますが明確に排除してきた対称性の概念です。法蔵がおこなっていることは、出来事や移り行く諸存在を永遠化することです。それぞれがその時間的場所にあって、実際にはその系列の全体に関わるという主張です。すべてが分離できず、またまったく区別がなく、いかなる自己存在も持っていないというのですから。

プロセスの見方は、これとは異なっております。過程のそれぞれの瞬間は、確かに過去の全系列の瞬間ですが、ホワイトヘッドが述べていますように、「未来にはいかなる出来事也没有ありません」。未来の実在<realities>は、現存するものではありません。つまりそれらには限定性が欠けています。しかし過去の実在は確かに現存しています。ホワイトヘッドは、過去の実在について、「それらは消滅したが、それでも未来永劫にわたって生きている」と述べています。私は「消滅する」という言葉を、「未来永劫にわたって生きている」という言葉ほど文字どおりには取りません。また

ホワイトヘッド学者の大半が、ホワイトヘッドは生成には実際に非対称性が存在すると考えていたことに同意するだろうと思います。ベルクソンの言葉では、生成は「持続<dure>」に相当します。これには、存在し来るものは直ちに破壊されるのではなく永続的に温存されるということが含意されておりますし、ホワイトヘッドがベルクソンと共有していた確信がうまく表現されてもいます。無時間的な永遠性ではなく無限な時間性である永続性が人生に本当の永遠を与えるのです。私たちの経験にはあらゆる価値を持った美や喜びが存在します。ホワイトヘッドはそれを「客体的に不死」だと表現しますが、これには次の二つの意味があります。一つは、私たちが過去の経験を覚えている限りでという意味、もう一つは、私たちが他の人々の経験を知覚したり認識したりする限りでという意味です。その価値の一部が私たちに実在すると言えるのは、その2つの意味においてです。もしこれが事の真相なら、人生の意味という問題に答えることにあまり意味はないでしょう。結局、長い目でみれば、私たちや他の人々のどのような経験が、後の人々や生き物に評価されて残るのかを知ることのできる人なのだと思います。ホワイトヘッドが有神論者である理由の一端は、この点にあります。私たちの経験において達成されたことを永続的に評価してくれるのは、神だけだとホワイトヘッドは言います。その最終的な客体の不死性が、神による評価なのです。

ホワイトヘッドは、「神が愛である」ことに同意するでしょう。彼は、「私たちにあっては不完全な愛も神においては完全である」と述べています。神は、すべての美を、すべての美的価値を、被造物のなかに被造物のために探し求め、それらの被造物を通して、神自身の生を求めるのです。これまでのどのような偉大な哲学者たちも、古代の普遍的な理想である愛と美の形而上学を、数学者であり物理学者でもあるホワイトヘッドほどにはうまく理論化できませんでした。苦しみから逃れることが主要な目標ではありません。苦しみからは完全には逃れられないにしても、大いなる幸せ<joy>の成就こそが目標なのです。この目標は紛れもなく積極的なものです。鈴木の本主張が正しければ、おそらく禅にはこれが含まれているでしょう。

仏教とキリスト教の福音によって、私たちは最善の努力を払って利己主義を乗り越えて、自分自身を愛するように他人を愛するようになれるのです。大乘仏教では、あるいは北伝仏教では、これが菩薩の理想を生みました。菩薩は、他の人類を無視して、個人が自己の救済を求めることを拒否します。私がキリスト教を批判する一つの理由は、永遠の罰として地獄を与え、幸運な人には永遠の楽園を享受させるという考え方に辟易しているからです。パリに亡命したロシア人のベルジャーエフは、地獄の観念を「サディズムの一種」だと述べ、地獄を避けて天国を求めて生きるべきだとする観念は、「これまでに考え出された観念のなかでももっとも受け入れ難い倫理」だと言っております。ベルジャーエフの神学は、ホワイトヘッドの立場にかなり接近していますし、フランスの哲学者ベルクソンも死期が迫った頃には同じ方向を目指しておりました。20世紀が宗教上の諸々の信念に重要な新たな考え方を生み出してきたと私が考えるのは、このような傾向があるためです。

私もパースと同意見ですが、彼は、26歳の時に認めたものに、「人間<man>を永遠に存続させる不死性の理論は、時間と空間との両面において人間の関心を越えさせようとする理論に比べ、気高さに劣る理論だ」と書いておりました。ただし私なら、このような文脈で man や him という人称代名詞は使いません。これは、まったく私の独自の考え方です。この点では、私は、中世のキリスト教とも立場が違いますし、ニルヴァーナを達成する前に、新たな誕生と死を繰り返す輪廻転生というような、少なくとも非常に一般的な仏教の考え方とも異なっております。

とりわけ仏教から見れば、私たちの全生涯と起こり得るすべての事柄を決定する全能なる神というキリスト教の観念は、捨て去るべき観念だと言えるでしょう。私は最近 *Omnipotence and Other Theological Mistakes* という書物を公刊しました。もし神がすべてを選択し、決定するなら、私たちには現実には何の選択も残らなくなります。しかしそうすると、わざわざ神が決定すると言ってみたとこで、それにどういう意味があるのでしょうか。このような全能という観念は、まったく馬鹿げています。あるいは矛盾しています。意志決定は決して独占されてはならず、あくまでも共有されるべきものです。神を、単純にすべてを創造する原因と考えるのは誤っています。私たちは、この原因によって創造された結果でしかないことになるからです。しかしささやかながらも、私たちは、原因であるだけでなく結果でもある神と共に、創造にあずかる創造的な存在でありますし、限られた仕方ではあっても、神の一部をも創造する存在なのです。これが、ホワイトヘッドの「神の結果的本性」という言葉の意味であります。神の生のうちには、被造物の決定がもたらす諸々の結果が存在するのです。この理論は、中世的神学からの完全な決別を示しています。ただホワイトヘッドが「神の始源的本性」と名付けるものだけが、被造物の作用に全く影響されないものであって、それは、本質的に全くの抽象概念だとホワイトヘッドは述べております。私が神の生と呼んでいる神の具体的な充全性は、原因であるだけでなく結果でもあり、独立的であるだけでなく依存的でもあり、不易的、不変的であるだけでなく可変的でもあり、絶対的であるだけでなく相対的であり、無限であるだけでなく有限でもあります。これは論理的に矛盾することではありません。なぜなら端的に原因であるような神、あるいは端的に創造的であって創造されず、絶対的であって相対的でない等々の神の側面と、その反対の諸属性を持った神とは、つまり結果としての神、創造される神、相対的な神とは、全く区別されるからです。矛盾は、或るものが同じ観点で同時に一つの属性と矛盾した属性とも持っていると言われる場合にのみ生じるものだからです。私の理論はこのようなものではありません。このような神の観点を、私は二面的超越性の理論と呼んでおります。これをはっきりと述べたのは私の工夫であって、ホワイトヘッドや過去数世紀にわたる多くの思想家たちは、これをいくらか仄めかしたり理論化したりした程度にすぎません。神に二つの本性を認めるホワイトヘッドの主張がもっとも私の理論に近ものです。ホワイトヘッドは、はっきりと神が無限であり有限であること、非時間的であり時間的であることを主張しました。しかし彼は始源的本性の絶対性は主張しましたが、結果的本性の絶対性は主張しておりません。始源的本性は不完全に現実的であり、すべての現実性は有限であると言ひ、結果的本性は現実的であると述べております。私の理論は、ホワイトヘッドの理論の矛盾や曖昧さを取り除き、それをもっと明瞭にしたものなのです。しかし中世神学からの完全な決別は、ほぼ四百年前のイタリアの神学者、ファウストス・ソツツイーニに始まっております。彼ははっきりと、神に永遠性と変化とを認めました。ヘーゲルは比較的曖昧に、またシェリングはもっと明瞭に、このことを見て取っていましたし、更にはっきりと捉えていたのは、おそらくドイツの心理学者、神学者のフェヒナーや前世紀のフランスの哲学者ジュール・ルキエでしょう。ホワイトヘッドは、イギリスのヘーゲル主義者を通したヘーゲル以外には、おそらくこの誰をも知らなかったはずで、パーソンも、ホワイトヘッドは知らなかったでしょうが、同じような考え方をしておりました。ホワイトヘッドがいなくても、二面性の観念に似たものは考えついたでしょうが、やはりそれには今以上の困難があったでしょうし、自信も論理的な明瞭さも今ほど得ることはできなかったでしょう。おおよそ明らかなようにこの二面性こそが、完全な永遠

性、生成のない完全な存在という中世の一面的な崇拜に代わるものだと言えるでしょう。この理論は、完全な永遠性と完全な時間性との間の中庸を目指す理論であって、それは、仏教の中道に比肩されるものです。仏教がこの両極端の中間を実際に目指していたとは思えませんし、一般に知られているキリスト教も、それを目指していたとも思えません。

ハーツホーンはミスプリントを訂正しながら、はっきりとした口調でこの基調講演を読み上げた。しかしこの国際会議では、ハーツホーンの思想を述べる報告はなされなかった。このことがいづらか残念であったのだろう。現存の哲学者シリーズの自伝には「誰も特に私の観点には触れなかった」<IAH.p.43>と記されている。

テキサス大学以後の彼の履歴については、自伝『光と影』にも先の哲学者シリーズの自伝の部分にも何も語られていない。これ以後のことは、筆者との個人的なやり取りからいづらか拾って簡略に記す以外にない。筆者はその後、1989年に約束通り『ホワイトヘッドの哲学』を訳し終え、ハーツホーン自身にそれを献呈した。折り返し送られてきたのが、自伝『光と影』であった。以降、『神の時間』、『中庸の知恵』と彼の著作を訳出してきた。1996年にはプロセス思想第7号の巻頭論文として、「徹底した実証主義に立つ有神論」を發表された。これは、松延慶二先生が依頼され、筆者が訳したものである。原稿は1995年に訳者に送られてきた。校正ゲラにも目を通されたが、訳者の見落としや原文の訂正を含め、厳密な校正が送り返されてきた。未だ矍鑠としておられる。

思想に突然変異は存在しない。ヴィトゲンシュタインなどが、一時歴史を超越した独創的な思想家だと囃し立てられたりもしたが、私にはその真意が理解しかねた。ハーツホーンの思想も、そういう意味では歴史の脈絡をまったく欠いた突然変異的な思想ではない。しかしかと言ってまったく独創性がないわけでもない。彼の思想は、先人の思想家たちの見落としや偏見を自分なりに修正、訂正しながら築かれた。時間が過去から現在へと一方向的に進み、それが同時に思想の進歩を生み出せるというのなら、ハーツホーンの思想も、確かに一つの進歩であった。こういう意味での進歩は、決して科学にだけ妥当するものではなく、哲学にも妥当しなければならない。時間の累積は、思想の累積である。思想は、着実に進歩、発展させうる。それが、人間を創造的断片として捉えるハーツホーンの形而上学上の原理であった。神の二面性について触れた先の基調講演には、彼が目指した思想の進歩が端的に語られている。見落とされてきた変化する神の一面に新たな解釈を施し、人間を全能の呪縛から解放した。神が世界に内在するとか、世界から超越するという従来主張は、あくまでも神を中心にした論点でしかなかった。問題は、世界がいかにして神に内在するかという点にある。でなければ、被造物が創造された意味がない。ハーツホーンの生涯は未だ途上にあるが、自らこの創造的断片を生きておられる。

80歳以降に出版された書物だけでも既に8冊、85歳を過ぎて書かれた書物が5冊。まさに驚異と言うべきであろう。しかも1997年7月5日には、ハーツホーン先生からまた一冊の書物が自宅に送られてきた。百歳になって出版された書物である。*The Zero Fallacy*という表題が付けられている。これには、過去の論文（一部修正を含む）7編と新たに書き下ろしの論文6編、編者であるモハマッド・ヴァラディー<Mohammad Valady>との対話一編の都合14の作品が収められている。ヴァラディーがはじめてハーツホーンに会ったのは1985年。彼がテキサス大学に在籍していた時である。ヴァラディーはテキサス大学で博士号を取得している。88歳のハーツホーンと昼食をしながら

ら親しく会話を楽しんだようだ<ZF.p.xiv>。後にはヴァラデーが質問を用意し、それに基づいて会話が進められるようになった。その時の会話が、この書物の第1章 “Points of View: A Brisk Dialogue” として収められた。

ヴァラデーも述べているように、ハーツホーンの飽くなき探求心は、必ずしも加齢によって精神が衰えないことを自ら身をもって示しておられる。

筆者に献本されてきた書物 *The Zero Fallacy* の余白にはこう記されていた。「あなたが言われたように、私はただ一心に神の栄光のなかに、その包括的な生命のなかに、生きています。その生命によって、死を免れない生き物すべての掛け替えのない価値は慈しまれ育まれるのです」と。

## XII 結びにかえて

1999年6月5日には、103歳の誕生日を迎えられた。ただ長寿を全うするのもそれほど容易ではないが、ハーツホーンは、ただ人生を長く生きただけの思想家ではない。未だに思索を重ねている姿には、おそらく何人も大きな感動を覚えるにちがいない。拙論を終えるにあたり、あらためて次の2つの文章を紹介したい。一つは、現代思想に対するハーツホーン自身の考え方を要約した文章(自伝『光と影』のエピローグとして認められた)、もう一つは、1998年2月23日付けの *U. S. News* に掲載されたハーツホーンの再評価を促す記事である。

### (1) 『光と影』エピローグ

この自伝『光と影』は10年以上も前に書かれたので、ここで現在の哲学をどのように見ているか、また来るべき姿はどうあるべきかについて、いくらかまとめておくことにしたい。私は哲学者たちを三つのグループに分け、それぞれ平凡な哲学者、聡明(創意に富み賢明)な哲学者、偉大な哲学者と呼ぶことにしている。このすべてのグループにそれなりの有用性は認められるが、結局は最後の偉大な哲学者のグループが、私には最も大切である。このグループを継承することによって純粋な進歩がはかられるからである。後のものが先のものを知ることができるという事実には込められた非対称性には—この場合先のものを知ることがほとんど不可能である—貴重な示唆があるにちがいない。我々人間はそれほど愚かであるはずがない!

ラッセルはどうだろうか。彼とは個人的な付き合いもあったし、彼の著作にもほぼ目を通してきた。彼は、偉大な哲学者であっただろうか。カルナップは「もっとも偉大な哲学者」だと考えた。ラッセルは確かに聡明であり、卓越した数理論理学者であった。明晰にあらゆる問題を論じた作家でもあり、総合的に考えると、おそらく偉大な人間ではあったろう。しかし私の考えでは、必ずしもそれほど偉大な哲学者ではない。パスモアが偏見を抱かずに合理的に判断しているように、ラッセルの哲学は、いくらか現代的な専門技術によって粉飾されているとは言え、本質的にはデイヴィッド・ヒュームの哲学であった。このようなことは、先行者との関係という点から言えば、プラトン、アリストテレス、エピクロス(彼のデモクリトスの改竄は相当なものだが)にも、またデカルト、ライプニッツ、ヒューム、カント、ヘーゲル(私の好みではないが)、パース、ベルクソン、ホワ

イトヘッドにも明瞭には見て取れないものである。クワインもいづらかラッセルに似ている。彼は、現存の哲学者の中ではもっとも影響力の強いアメリカの哲学者だろうが、哲学者が扱う生き生きした人間の関心事の多くをどれほど置き去りにしていることだろうか。彼のもっとも独創的な貢献の一つは、必然的真理と偶然的真理の区別の境界を曖昧にした点にある。これはカルナップですら保持することを願った区別であったし、かつてシカゴでカルナップは、この点に関してクワインに反論をおこなったこともある。私を含む一部の聴衆には、うまい反論だったと思われた。ウィリアム・ジェイムズは、既に果敢にもほとんど全体論的とも言えるような経験主義と偶然主義とに到達しようとしていたが、クワインは、それを更に押し進めて自分にも確信が持てなかったような理論へと進んでしまったようだ。

現存の哲学者の中でもっとも卓越した主張を行っているのは、カール・ポパー卿である。彼は、様々な問題に光を投じた。経験的ないし偶然的な真理と形而上学的ないし必然的な真理との間に、もっとも有効な鮮明な区別を引いたのは、彼が最初であった。つまり、偶然的真理は何らかの思考可能な観察に矛盾するが、必然的真理はいかなる思考可能な観察にも矛盾しないという主張である。私はこの主張をいづらか修正したが、おおむね彼の意見には賛成であるし、これは画期的な主張だと思っている。

私は、ポパーに近い考え方で、一つの形而上学的真理「或るものは存在する」という命題を考えた。これは、どのような経験によっても支持されるし、いかなる経験にも矛盾しない。「無が存在する」ということは、とうてい思考上で観察できるものではない。それは単に言葉上のことにすぎない。しかしこの瞬間まで生きてきたということは、偶然的な真理である。私が遥か昔に死にかけたとか既に死んでしまったということに、何の不合理もない。実際に私は死にかけたことがあるし、証人もいる。ただ無知な者や不合理な迷信を信じている者だけが、死がまさに存在し得ることを疑えるのである（その場には神も存在したが、神ですらまったくの非存在を観察することはできなかった）。興味深いことに、ベルクソンは、「無は存在したかもしれない」という命題が無意味だという主張に同意している。ポパーは、既に指摘したように、数多くの知性の罫を回避している。例えば無制限な決定論、実証主義、還元主義的唯物論などである。またポパーの論議には、ある肯定的な経験的主張を反駁するのは否定的な主張ではなく、もう一つの肯定的な主張であるとする論議があるが、これは賞賛に値する論点である。つまり「地球は観察上は球形である」は、「地球は扁平である」に矛盾する。まったくの欠如ないし欠乏は観察不可能である。石にはまったく感情がないと言うのは、石には何か或るものがあるって、それはその石に感情がある場合には、存在し得ない何かであるということなのである。デカルトは、この或るものを延長だと言った。これは深刻な反論を呼んでいる。精神が拡がりでないことは証明されていない。デカルトはただそう述べただけである。私には、肯定的な性質によって自然のすべての部分から感情が排除できるとは思えない。もちろん石は感じない。それは余りにも動きがなく変化の中にあっても完全すぎるほど自己同一的である。原子や分子は、それが構成する石とはかなり異なっている。感じるものは活動するが、石が活動すると言うのはカテゴリーの取り違いである。石は動かせるが、それは分子の運動によってもたらされた変形的運動である。その活動は一つの集団の活動であって、単一な作用者の活動ではない。

「神は存在しない」と言うのは、石に感情を否定することに類比される側面とまったく異なった

側面とがある。我々は、感じという言葉がどういう意味であるかはよく分かっている。我々は、自分自身を実際に感じ取っているし、感じ取っていることを知ってもいる。しかし神という言葉は、それほど簡単にかつ直接的には説明できない。カルナップは、自分を無神論者と呼ぶのを拒んだ。カルナップの観点では、有神論は誤りでさえありえず、むしろ何ら一貫した認識論的意味がないものと見なされた。この言葉は多くの人々によって使われているので、一貫した意味が欠けているという見方には、私もカルナップと同じ意見である。この点については、後にもう少し詳しく述べようと思う。

ホワイトヘッドは、現代思想を考えるにあたって、「(古代)ギリシャ哲学に関する長期にわたる一つの誤解」という表現を使用した。この誤解は、中世哲学ないしそれ以前の哲学に端を発したものである。プラトンとアリストテレスは、不十分にしか知られていなかったし、知られていても最善の部分が取り逃がされていた。(ホワイトヘッドですらこの両者を過小評価していた)。エピクロスがギリシャ唯物論に行った改良—とりわけ厳密な決定論を拒否したこと、つまり原子レベルに自由な運動や不規則な運動という局面を持たせたこと—は、正当に評価されなかった。この三人のギリシャの哲学者たちはすべて、出来事は必然的ではあるが、それは「必要十分な」因果的条件ではなく、この宇宙には秩序と同時に何がしかの無秩序もあるということでは、同じ意見であった。プラトンは、精神ないし靈魂が存在することを、自己変化を拡大解釈した「自己運動」という概念で捉えたが、これは、ベクルクソン、ベルジャーエフ、ホワイトヘッドの創造性やパースの自発性を先取しており、まさにプラトンの発見の中でも最大級のものであった。これは驚くほど軽視された。バーネットによれば、プラトンの偉大な発見は永遠的形相ではなく、精神や靈魂であって、それが『国家』、『パイドロス』、『ティマイオス』、『法律』第十章の中心テーマであったと言われる。私もこの意見に賛成である。プラトンは、すべての変化を、靈魂が善を求める自己変化、ないし創造性として解釈することに好感を抱いたであろう。プラトンは、確かに靈魂の変化がすべての変化の源泉であると述べていたが、物質が他の物質か他の靈魂かのいずれかによってのみ動かされるという観念は捨て去ることができなかった。そういう意味では、彼は二元論者であって、精神一元論者<psychicalist>ではなかった。アリストテレスの二元論も、それほど明白に理論化されているわけではないが、出所はほぼ同じであった。

唯物論者たちは、靈魂を運動する特殊な原子と名づけることで何とか切り抜けようとした。しかし唯物論者にとっては、すべての原子は自己運動的で、自然はそのような原子からのみ成り立っていると見なされた。ということは、プラトンの靈魂の定義や、エピクロスの宇宙論から見れば、単なる物質というものは存在しないことになる。どういうわけか、エピクロスはこれを見落としてしまった。この点ではアリストテレスも役立たなかった。彼ですら、精神は自己運動的であるという主張を認めなかったし、ストア派やスピノザも役には立たなかった。彼らには、自己運動という概念が意味のある概念だとは思えなかった。それぞれの事物は、どれほど時間的に隔たっていても、因果的に先行しているものによって決定されていることを行うと見なされた。目的論とは、単に機会論に体のいい名前を与えたものでしかない。神の諸決定が唯一の決定である。あるいはむしろ、いかなる決定も、いかなる自由も、いかなる偶然性も存在しないと言う方がよいかもしれない。実在の限定性に創造的な付加を加えようとするのが、つまり完全に確定された可能性ではなく、単に抽象的でしかない可能性を、確定した具体的な現実性に変形するのが、常に余りにも遅るのである。



また変化を通じた実体の同一性という問題もある。プラトン（『ティマイオス』によれば、変化は、漠然とした宇宙的規模の「容器」に基づくとされ、その中で諸々の性質が得られたり失われたりすると言われる。アリストテレスは一この解釈は、エモリー大学の同僚であるファン・ホアン・チェンとの会話だけから一部示唆されたものだが一この容器を複数化した。それぞれの実体（これはプラトンから一步後退だが）は、お互いに他の実体から厳密に区別され、まったく同一ではないものと見なされた。しかしこれは、どのような有機体の細胞理論とも矛盾する考え方である。しかしアリストテレスは、後のライプニッツとは異なり、自己同一性を制限して、必ずしもその同一性に必要とは言えない質的な変化を認めた。ライプニッツはこの問題で、愚かにも純粋な連続性を完全に否定する方向に後退してしまった。一方、同一性が制限されたこの観点では、同一性の範囲が、つまり個体の一貫した唯一性と統一性の範囲がどの程度なのかという問題が生じる。ライプニッツはこの問題を正しく見抜いたが、成功を声高に叫ぶことなく、かなり思い切った解決をほどこした。スピノザは、この分離も偶然性もまったく否定した。

現代ではこの問題もかなり様変わりしてきた。砂山は、確かに動かないが、それを構成する分子は動いている。しかし実在の基本となる究極の単位は出来事であって、物や人物ではない。物理学はようやくヘラクリトスや仏教の見方に近づいてきた。加えて、世界の統一性は、相対性理論でも量子理論でも、アリストテレスの多元論の形式を意味のないものになっている。彼の形而上学は決して十分なものではなかった。先行者を抱握しつつ、その後に一連の社会を形成するような、ホワイトヘッドの言う現実存在＜actual entities＞は、確かに実体がどうあるべきかを十分に示唆している。この単位実在、つまり新たなモナドは、「窓」を持っており、その窓を通じてそれらは経験し、同時に他のモナドによって影響も受ける。それらの実在からなる社会も、他の社会によって影響を受けるのは言うまでもない。窓がないというのは、知覚による抱握＜prehension＞がないということ、あるいはあってもせいぜい記憶を助けるような抱握でしかないという意味である。しかも窓がないということは、同時に単的存在である量子が欠如していること、従って知覚による抱握も、それらを抱握する独立した主体が存在しないために、不明瞭なものになるということである。パースは、独自の連続理論＜synechism＞を唱道していたために、この問題ではホワイトヘッド以上に苦しんだ。彼には量子論の恩恵を受ける機会がなかった。

ホワイトヘッドは、充足理由律の定説を極端に解釈することにはまったく関心がなかったので、偶然性ないし開かれた未来の秘密を普遍的な自由として存分に理論化することができた。悪の問題は、それほど致命的なものにはならなかった。具体的な惨事が生じる理由を正確に見い出す必要などないからである。それらの惨事は、一面では、自由な神と自由な被造物の多様な交わりから生じると言えるからである。ただ災厄の生じる可能性については、事実としてではなく、神学的に説明する必要がある。この災厄の生じる可能性は、災厄と好機が不可分であるということによって説明がつく。神の自由であろうと被造物の自由であろうと、自由は、善と悪との両方を必要とするし、いかなる出来事にも必要である。要するに、自由はどこにでもいつでも存在しなければならない。偶然的なものはすべて、自然法則の（完全には確定されないが、近似的ないし統計的には確定できる）特殊な形式であって、そのような法則がなければ、自由は単に存在しえない混沌か、あるいは決定の混乱でしかないことになる。

微視的な有機体の発見は、ライプニッツがその天才的な洞察力で細胞理論（大きな有機体は小さ

な有機体によって構成されるという発見)を先取していたように、精神論<psychicalism>への積極的な支持を促しているし、これはギリシャ人には見落とされていた性質の一つであった。この理論は、単に細部に関わる理論ではなく、基本的な一つの原理である。この理論がなければ、動物と植物との差異はきっと誤解されるだろうし、実際にも誤解されてしまった。植物は活動的な単一体ではないが、動物はそうである。アリストテレスの植物魂は一つの神話的解釈だが、実際に自己変化を行っている植物の諸細胞は原始的な魂に他ならず、この点では動物の諸細胞と比肩される。ホワイトヘッドは、細胞、統計的な気体法則、分子、原子等々の知識を踏まえた上で、微視的な有機体の理論を更に押し進めることができた。おそらく振動する「弦」はその最先端であろう。

確かにギリシャ人は、物質の本質をほとんど分からないまま向こう見ずな推論をせざるをえなかったが、我々には本当の物質の状態がかなり広範囲に知られている。まったく作用を起こさないもの、あるいはまったく機械的なだけの作用というような概念はもはや放棄され、現在では、多くの作用が、動物にも、動物や植物以下のものにもあることが分かっている。身体や物質に要求されるのは、もはや非心的であることではなく、心的なものが広範囲に渡って配分され、それらが始源的でささやかな単一の統一体の形態を取ると認められることである。

私は、私の同僚たちが諸観念を判断する際の彼らの知性能力と個々それぞれの才能を判断する知性能力とを明確に区別する。凡俗の科学者にも偉大な科学者にも、アインシュタインの物理学に関する見方に十分な考慮を払うべきだというのは分かってきた。同様に、シーウォール・ライトも一彼の妻は私たちとは昵懇の中だが、ダーウィン以来の卓越した生物学者であることは広く知られている。彼も、私と同じように、唯物論も心身二元論も誤っており、また実際、論理的にも真ではありえないこと、そして少なくとも感覚力のある多種多様なすべてのものに認められる非二元論的な心的存在<psychicalism>が、自然界の実相だと確信していた。

## (2) 神を百年間思索し続けた哲学者

再発見される日もそう遠くないだろう

クレッグ・イースターブルック

「生きることの報償は、生きていることそれ自体にある」とハーツホーンは言う。この言葉は、百年間その報償に預かってきた彼自身がなによりよく知っているはずである。百歳を越えた哲学者ハーツホーンは、喧しい文化戦争とも言える状況にあって、縁の下を支える無名の英雄である。ボストン大学総長のジョン・シルバーによれば、ハーツホーンは、二十世紀のアメリカでも「十本の指に入る」哲学者だと言われる。また彼こそは、今世紀最大の宗教哲学者だと言う者もいる。しかしにもかかわらず、ハーツホーンはほとんど知られていない。おそらくそれは、彼の書著作が第二次大戦後に主流となっている思想界のタブーを犯しているためであろう。というのも、ハーツホーンは、神が実際に存在していると信じているからである。

戦後一貫して主要な大学で圧倒的に優勢を誇ってきた「ポスト近代主義」の最中であっては、神の存在を支持するような深刻すぎる考え方は、ほとんど省みられることがなかった。「どのような論理的思考形式も、この二十世紀にはますますはやらなくなっている」とは、アメリカの教養

教育学会の代表であるジョージ・ルカース R. ジュニアの言である。しかしこれにも、変化の兆しが見えつつあるようだ。ポスト近代主義が根本に据えている主張は、生を意味な偶然事と捉える見方だが、この考え方に現在、集中砲火が浴びせられているのである。ハーツホーンが得意とする「形而上学」—より高度な真理の探求—が再び注目されてもよい時期ではある。ハーツホーン自身の著作が何らかの形で再発見されることによって、これまで黙殺されてきた不当な評価に歯止めがかけられるかも知れない。これは、死後十数年経って再評価される偉大な思想家によく見られることだが、幸いにもハーツホーンは今なお健在である。

ハーツホーンの哲学では、いくらか正統教義から逸れた神に関する仮定ですらも、創造には目的があり、かつ純粋な真理は存在するという論議が支持される。「神が存在しないなら、我々は一体どのようにして何が真理かを知りうるのか」とハーツホーンは投げかけている。「人間は、結局あらゆる時代を通じて、かいつも自分自身のことが分からないできた。おそらく我々以上に高度に真理を理解する大きな存在がいるにちがいない」。

## 理性と信仰

1897年ペンシルヴァニアの小さな町に生まれたハーツホーンは、クエイカー教徒を先祖に持つ監督教会派の牧師の息子であった。ハーツホーンによれば、「私の家族には宗教を信じない者はいなかったが、進化論を信じなかった者もいなかった」と言う。この一見相反する観点がハーツホーンの著作の特徴となった。彼の著作の大半は、もっぱら神学上の問題に合理性を適用しようとするものであった。

ハーツホーンは、クエイカーの子孫であることを利用して、召集令状を避けようと思えばできた可能性があったにもかかわらず、自ら進んで、あの偉大な世界戦争である第一次大戦にボランティアとして参加した。彼はまさしく第一次世界大戦の経験者であった。除隊の後、彼は、ハーヴァードに入り、名声を博した哲学者たちの一人であるアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの元で研究に励んだ。世界大恐慌の前年、彼は、シカゴ大学の哲学教師として採用された。そのシカゴ大学で、彼は、ホワイトヘッドが晩年「プロセス神学 (processtheology)」と呼んでいた考え方—神は将来を見渡すことができないので、人間の振る舞いに応えてを変化することができるという考え方—を入念に仕上げ直した。

もし未来が超自然的に知ることができるなら、どんなことにも予測される事柄が含まれる以上、神は、既にそうするように決められたこと以外には何もなせなくなるだろう。つまり世界の創造者ですら、自由な選択ができないということである。しかし未来がまだ現に存在しないものだとすれば、それは、神性にとってさえも知ることのできるようなものではないことになる。この第二の仮定から、ハーツホーンは、ある変化する神が人類に絶えず応答し続ける過程の中にあることを必要とすると結論づけた。これこそが、神学の主要な謎—例えば、旧約聖書の怒りに満ちた神が、どのようにして新約聖書に見られる共感者としての創造者になったか—を解き明かしようものだと、ハーツホーンは感じた。

このプロセス神学の論理を利用して、ハーツホーンは、不信仰を、いかなるものも人間ほど偉大なものはないとする利己的な観点の現れだと断罪した。「我々に現在必要なことは、新たな試みに

挑戦して、神の目標を崇敬することであって、先祖たちが神について述べた種々の理論を崇めたてることではない」というのが、彼の論点であった。「このような考え方は、同時に、不信仰がしばしば理性の象徴だと見なされている高尚な学会への批判となり、また創造者にも欠陥はあると示唆することで、キリスト教界への批判ともなった。いわゆる学者のエリートたちは、「プロセス神学をあまりに宗教的なものとして軽蔑しておきながら、ハーツホーンを、正統教義にあまりにも逆らう過激な人物だ」と見なしているのは、滑稽の極みであると言っているのは、テキサス大学の哲学教授ロバート・ケインである。

## ハーツホーンの業績

ハーツホーンはこれまで、およそ20冊の書物を著し、同時に19世紀の論理哲学者チャールズ・サンダース・パースの思想を著作集の形で公にした。ハーツホーンの最善とも言える著作は、『全能、およびその他の神学上の誤り』を含めて、ようやく80歳になってからのものである。ニューヨークで弁護士をしている彼の娘エミリー・グッドマンによれば、ハーツホーンは大学を退官する際に、箱や引き出しに大切にしまい込んである未完の種々の原稿を娘に差し出して、「もし私が死んだら、誰かが私の仕事を完成してくれるはずだ」と言ったと言うが、グッドマンは、「ほかでもなく結局は、ハーツホーン自身がそれを完成させてしまった」と述べている。

ハーツホーンには、鳥類学者としての一面もあり、チャールズ・ダーウィンが好んで取り上げた鳥類の自然選択の研究に取り組んだ。彼は、鳥類学者としても十分な名声を得たが、ボストン大学のシルバー教授によれば、彼がその気になれば、動物学の教授としても終身雇用契約を結べただろうと言われている。彼が一九七三年に公刊した『生まれながらの歌姫たち *Born to Sing*』では、鳥の中にはメロディーを正しく判断できるまでに能力を進化させたものもいたが、今ではそのような鳥たちも、ある程度は、ただ楽しむために囀っていると主張されている。「鳥たちの囀りを聞いたことのある音楽家たちは、鳥類学者たちが擬人化という非難を怖れるあまり口に出せないような、この楽しむための囀りという観点を、彼ら以上に信じている」とハーツホーンは言っている。「世界中の鳥の囀りを何千時間も聞いた結果、私は、鳥の中には、我々の感性と比べると見劣りするものの、美的感性を持っているものがあるという確信に至った」。

彼は、現在、テキサス州オースティンの小さな家に、住み込みの家政婦さんと住んでおられる。67年間連れ添ったドロシー・クーパー婦人は、1995年に死去された。彼女は、ソプラノの音楽家としての古典教育を受けた。ハーツホーンは、自分が居間の椅子に腰を掛け、ドロシーが自分によくモーツァルトを歌ってくれていた日々を思い出しながら、「私はほんとに恵まれていました」と述懐していた。

彼の体力は現在かなり弱っており、老化に伴う陰鬱さからか、外出するようなこともほとんどない。彼は、毎日、自分の著作を読み返しては（「こうして読み返すのが、たとえ誤りが見つかって、何よりの楽しみだ」と言う。）、編集者に、自分好みのテーマについて、例えばフェミニズムには賛成、死刑制度には反対、自転車には賛成（ハーツホーンは車を持ったことがない。運転しようと何度か試したようだが、自らのあまりの不器用さに落胆したようだ）、牛肉や羊肉のような赤身の肉には反対（自分が長寿なのは、菜食主義も一因している）、平和主義は昔は賛成、現在は反対

(「ヒトラーによって平和主義が信じられなくなった。ヒトラーの所業は人類が世界に対して行った残虐行為の中でも最大のものの一つである」) というような手紙を書き続けている。百歳の生涯を振り替えて特に考えることは、「我々はあらゆることが語られてきた世界に生きているが、現在やるべきことは、それらのどれを否定すればよいかを突きとめることである」と言う。

ハーツホーンは、自分が死すべき存在であることもためらわずに直視している。彼の死に対する見方は、「謙虚だが確信に満ちたものである」。曰く、「意識は存在しなくなるが、それぞれの思想や感情や経験は、「神によって永遠かつ鮮明に記憶される」と。これまでに起こったすべてのことを記憶し、讃えることこそが、ハーツホーンによれば、神の最終的な役割であり、そのような無限の神の記憶は、誰にでも貢献できる形而上学的真理そうであるように、蓄積されて行くものだと見なされる。

「私は、昔ながらの古風な環境の中で、幸せかつ長閑に、少年時代を過ごした」。ハーツホーンはいくらか疲れた様子で喋っていたが、疲れ切ってはいなかった。「私が過ごしたその町に行かなくても、私が幸せであったそのひとときを見ることはできないでしょう。しかしそれらのひとときは、間違いなく神の實在の一部になっています。神の實在については、今現在でも事実に基づいた陳述をなすことができます。私の幸せな少年時代は、両親と世界が神に捧げられた一つの贈り物なのです」。いつの日か、ハーツホーンの思想も、これらの贈り物の一つに数えられ、理解される日が来るだろう。

## 現代の思想状況

二十世紀のアメリカ哲学は、思想を二分する風潮に染まってきた。

**実証主義**は、経験的に検証される概念だけを認めている。それは、十九世紀を呻吟させたわけの分からぬ種々の思想を破棄するのに大きく貢献したが、同時に精神をも存在しないものと見なした。

**論理実証主義**は、諸観念を、より大きな實在から遊離させて、もっぱら言葉の構造として捉えている。その理論自体は中立的であるにもかかわらず、それはしばしば、「ポストモダン」の哲学が主張する「真理は単に偶然的主張にすぎず、最終的な善悪を云々できるようなものではない」という考え方を支持するように要求する。

最近の思想界には、流行はしていないものの、形而上学を標榜する第三の学派が形成されている。そこでは、より高い真理が文化や時代とは独立に存在すると主張される。形而上学は、超越性の意味をより深く追求するために、戦後の学会からは蔑視のまなざしで見られ続けてきた。ハーツホーンは、この形而上学の松明を携えてきた数少ない哲学者の一人である。

[1999年11月30日 受理]